

令和 4 年 6 月 2 日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02670

研究課題名(和文)箱庭を用いた教師の教育相談力を高める体験型グループ研修の実践研究

研究課題名(英文)Practical research on training group using sandplay for educational counseling

研究代表者

久米 禎子 (Kume, Teiko)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：90388215

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、心理療法の一技法である「箱庭」を活用して教師の教育相談能力を高めるためのグループ研修を実施し、その効果を検証することであった。箱庭の個人制作およびグループ制作を行う「箱庭体験グループ」(全7回)を、メンバーを入れ替えて2回実施し、グループ前後での教師の意識の変化、グループにおける教師の内的変容プロセス、教師グループの力動とその変化について、質問紙、インタビュー、箱庭作品により分析した。その結果、箱庭を用いた教育相談研修は、教師の自他に対する理解と受容を促進し、教育相談に必要な資質を高めることに一定の効果があることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教育相談体制の充実や教員の教育相談能力の向上は学校現場における喫緊の課題であるが、児童生徒理解やコミュニケーション力といった教育相談的資質を高めるためには教師の自己理解、自己受容、他者への共感的理解が欠かせない。本研究は箱庭を用いたグループ研修が教師の自己理解や他者理解を深める効果をもつことを示し、有効な教育相談研修のモデルを提示するとともに、教育相談的資質の向上における教師自身の体験的理解や内的成長の重要性を示した点においても、今後の教員養成や教師教育のあり方に新たな視座を与えることができたと思われる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to conduct the training group utilizing sandplay, a technique of psychotherapy, to enhance teachers' educational counseling ability, and to verify its effectiveness. In the training group, members experienced sandplay individually and in a group, and (1) changes in teachers' perception before and after the group, (2) the internal transformation process of teachers, and (3) the dynamics and changes of the group were analyzed by questionnaires, interviews, and sandplay works. As a result, it was shown that the training group using sandplay had promoted teachers' understanding and acceptance of oneself and others, so it can be inferred that it is effective in enhancing the abilities necessary for educational counseling.

研究分野：臨床心理学

キーワード：箱庭 教育相談 教員研修 自己理解 自己受容 共感的理解

1. 研究開始当初の背景

不登校やいじめ、暴力行為等の問題行動、児童虐待や相対的貧困率の高さなど、児童生徒とその家庭をめぐる問題が複雑多様化するなか、教育相談体制の充実や教員の教育相談能力の向上は学校現場における喫緊の課題である。しかしながら、教師の教育相談力を高める効果的な研修方法については未だ十分に検討されていない。今日、教育相談とは「1対1の相談活動に限定することなく、すべての教師が生徒に接するあらゆる機会をとらえ、あらゆる教育活動の実践の中に生かす」(学習指導要領(中学校特別活動編))ものとされている。従来の教育相談では個別のカウンセリングの実践が重視されてきたが、学校現場においては、日常の中で機会をとらえて柔軟に行う「“教師ならではの”『教育相談的関わり』を行う」(笠井, 2015)ことが現実的かつ効果的であると考えられる。そのためには、春日(2016)が教師が身につけるべき基本的な教育相談的資質として挙げている児童生徒理解とコミュニケーション力が重要であり、その基礎となる自己理解や他者理解に焦点をあてた研修が有効であると考えられる。しかし、このような資質は書籍等だけの学習や1, 2回の研修で身につくものではなく、一定の期間をかけて体験的に学び、その中で教師が自己を振り返り、教師自身の内的変化が起こることで、教師の日々の態度となっていくものである。そこで本研究では「箱庭」を活用して、教師の自己理解、自己受容および他者への共感的理解を促進する体験型グループ教育相談研修を実践し、その効果を検証することとした。

「箱庭」とはスイスのD.M.カルフによって治療技法として確立され、1965年に河合隼雄によって「箱庭療法」としてわが国に導入された心理療法の一技法である。治療者との安心できる関係のなかで、内法52×72×7cmの砂の入った箱にミニチュアの人形や動物、植物、乗り物、建築物などで内界を表現することで自己治癒力が働き、象徴体験によって治療が進んでいくと考えられている。箱庭は通常心理療法場面で用いられるが、自己理解やイメージ体験、グループ力動などを体験的に学ぶために実習やグループワークに取り入れられ、自己への気づきや感受性を高める効果があることが報告されている(岡田, 1993; 豊田, 2014; 久米, 2015など)。箱庭を用いた研修は教師の自己理解や自己受容、他者理解を深めることにも役立つと予想される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、箱庭を活用した体験型グループ研修を実践し、教師の教育相談力を高める効果があるかどうかを検討することである。教育相談的資質として重要な児童生徒理解とコミュニケーション力の基礎となる、自己理解、自己受容、他者への共感的理解に着目し、その効果を、研修前後での教師の意識の変化、研修における教師の内的変容プロセス、研修における教師グループの力動とその変化、の3つの側面から明らかにする。なお、グループの展開には個人、集団、ファシリテーター等複数の要因が関係することが予想されるため、参加者を替えて2回実践し、比較検討してグループ研修の効果と課題を明確にすることとした。

3. 研究の方法

(1) 対象

現職教員13名。2018年度および2019年度にメンバーを入れ替えてそれぞれ1グループずつ実施し、2018年度は6名(Aグループ)、2019年度は7名(Bグループ)が参加した。校種は小学校9名、中学校2名、高等学校2名であった。

(2) 手続き

事前調査：参加者に個別に質問紙を配布し、記入を求めた。調査項目は1)フェイスシート、2)自己受容尺度(櫻井, 2013)、3)存在受容感尺度(高井, 2001)、4)他者受容尺度(櫻井, 2013)、5)教師のイラショナル・ピリーフ尺度(土井・橋口, 2000)であった。

箱庭体験グループ：大学内の箱庭のある面接室で月1回×7回実施した。研究代表者がファシリテーターを務め、実施時間は1回あたり約2時間であった。グループのすすめ方は岡田(1993)および豊田(2014)を参考にし、個人制作とグループ制作を複数回行った。参加者の承諾を得て、箱庭制作の様子はビデオカメラで、作品はデジタルカメラで撮影し、シェアリングはICレコーダーで録音

した。また参加者には、各回の終了後、あらかじめ配布した用紙に体験のふりかえりを記入し、次の回に提出してもらった。

事後調査：箱庭体験グループ終了約1カ月後に個別に実施した。質問紙を手渡し、その場で回答してもらった。調査項目は事前調査2)～5)と同様である。

インタビュー調査：事後調査と合わせて行った。1)参加前の興味、動機、期待、2)グループ制作の作品と体験、3)個人制作の作品と体験、4)自己に対する気づき、5)他者に対する気づき、6)グループでよかった点・難しかった点、7)教員研修としての効果や活用方法について尋ねた。

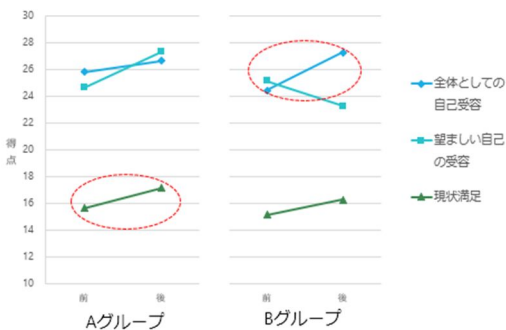
フォローアップ調査：グループ終了約10カ月～1年後に郵送により実施した。箱庭体験グループおよび教育相談について尋ね、自由記述により回答してもらった。

4. 研究成果

(1) 研修前後での教師の意識の変化

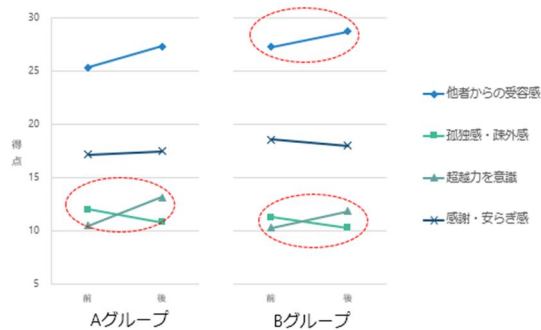
質問紙の検討：各尺度得点を算出し、グループ参加前後で変化がみられるかグループ別に平均値の差の検定を行った。その結果、「自己受容尺度」「存在受容感尺度」「教師のイラショナル・ビリーフ尺度」においていずれも5%水準で有意差が見られた(図1~3)。

インタビューの分析：質問項目のうち【自己に対する気づき】【他者に対する気づき】についての語りを分析対象とし、それぞれ回答を分類した。



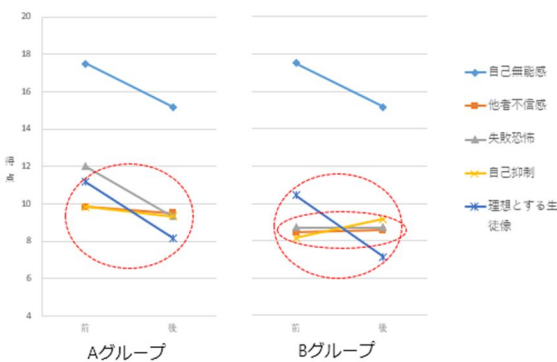
Aグループ：「現状満足」↗
Bグループ：「全体としての自己受容」↗

図1 存在受容感尺度



A・Bグループ：「超越力を意識」↗
Bグループ：「他者からの受容感」↗

図2 自己受容尺度



A・Bグループ：「理想とする生徒像」↘
Bグループ：「自己抑制」↘

図3 教師のイラショナル・ビリーフ尺度

質問紙の結果から、グループ参加後に参加者はこれまでの自分の生き方や、欠点も含めたありのままの自分をより受け入れられるようになるとともに、自分が大きな力によって生かされ、守られている感覚をもてるようになったことが示された。また、インタビューの分析から、これらの変化は自他の箱庭の表現の仕方や作品、他のメンバーのコメントからの気づきや、自分の表現が肯定的に受け止められる体験、日常とは異なる自由な心の動きなどによってもたらされたことが推測された。自己受容がすすんだことで、他者のありのままを認める「他者受容」もすすみ、それが「生徒はこうあるべき」という思考の緩和につながったと考えられる。これらのことから、箱庭を用いた教育相談

研修は、自他に対する理解と受容を促進し、教育相談に必要な資質を高めることに一定の効果があることが示された。

(本研究成果は「箱庭を活用した教育相談研修の効果 自他に対する理解と受容に着目して」というタイトルで日本箱庭療法学会第34回大会(オンライン)において発表し(2021年10月10日),論文として公表を予定している。)

(2) 研修における教師の内的変容プロセス

一連の個人制作およびグループ制作によって参加者にどのような内的体験が生じていたかを,4つの事例を取り上げ,箱庭作品と参加者自身によって記述されたふりかえりを素材に検討した。その結果,参加者は他者との安心できる関係の中でより自由に自分を表現できるようになり,自分や他者をこれまでとは違った視点でとらえるようになっていったことがわかった。こうした自己理解や他者理解の深まり,他者に受容され,非言語的つながりを感じる体験は,参加者の教育相談的資質を向上させることに寄与したと考えられる。こうした変化が生じた要因として,他の参加者の様子を見たり,シェアリングの際に他者の感想やイメージを聴いたりしたことが重要であったと考えられる。他者の受け取り方が自分のそれとは違っていても,「伝わらないことがあって当然」と思うことで楽になり,他者の多様な感じ方を楽しめるようになっていた。それが「ありのままの自分」「ありのままの他者」を受け入れることにもつながっていったと考えられる。こうした体験は受容的な雰囲気があるのはじめて可能になるものであり,各人が率直に発言でき,同時に受容的でもあるような場の雰囲気を作ることがファシリテーターの重要な役割であると考えられる。

(本研究成果は「箱庭を活用した教育相談研修における体験過程の検討-個人およびグループでの箱庭制作体験に着目して-」というタイトルで鳴門教育大学研究紀要第37巻(2022)に掲載された。)

(3) 研修における教師グループの力動とその変化

グループで制作された作品とその変化,および参加者へのインタビューを分析することにより,グループにおいてどのような体験が生じるのか,またそれらが教師の自己理解や他者理解を促進するかどうかを検討した。制作体験では,他者の置いたものに関して,最初の頃は戸惑いや違和感を覚える人が多かったが,やがてそれをその人の個性として受け入れられるようになっていった人が多かった。と同時に,自分もより自由に自分を表現し,自分の個性を認められるようになっていった。またシェアリングは,自分とは異なる他者の思いに気づき,自分自身を改めて見つめ直す機会となっていた。これらのことから,グループ箱庭には自己理解や他者理解を促進する効果があると考えられる。そして,そこで得られる気づきは,体験をとおして自ら得ていく性質のものであり,そのようにして得られた体験的理解はその人の考え方や態度に影響を及ぼし,日々の児童生徒との関わりにも反映されていく可能性が高いものと考えられる。さらに,参加者がリラックスして楽しみながら参加できることも,グループ箱庭を教員研修に活用するメリットであると考えられる。

(本研究成果は「グループ箱庭を用いた教育相談研修における教師の体験と気づき 作品およびインタビューの分析から」というタイトルで鳴門教育大学研究紀要第36巻(2021)に掲載された。)

(4) 教育相談研修の現状と課題

本研究において,箱庭体験グループはある程度回数を重ね,継続的に行うことでその効果が高まることが示されたが,今後,こうしたグループをとにかく多忙で効率が重視される学校現場において実践するためには,時間と場所をどう確保するか,モチベーションをどう高めるかなど,教育現場の実態をふまえた工夫が必要である。そこで,事前調査およびフォローアップ調査の回答から,教師自身が捉えている学校教育相談の現状や研修に対するニーズを明らかにし,これらをふまえて学校現場の実態に即した研修のあり方を検討することとした。分析の結果,教師は効果的な教育相談を行うために,教師自身の力量を上げることと,教師のゆとりや,教師間・専門職との連携などの職場環境の改善が必要だと考えていることが明らかとなった。教師の力量については,知識やハウツー的なものを身につけるといっても,日頃から児童生徒を観察し,変化にいち早く気づき,背景も含めて多面的,柔軟に理解し,適切に関わる力,言うなれば,本質的な「教師力」とでもいうべき力を重要視していることがわかった。そして,そのような力をつけるためには,知識や技法だけでなく,表現活動などを通して自分自身を理解することや,実際の事例をとおして実践的に学ぶことが必要であると考

えていることもわかった。今後の教育相談研修においては、従来の内容に加え、教師が自分を理解することや、他者との人間関係の中で学び合うことを含む、より本質的な教師の力量を育む研修を開発・工夫することが求められていると言える。本研究において実践した箱庭を活用した教育相談研修は、砂箱にミニチュアを置くだけなので心理的抵抗感や負担感が少なく、解釈や分析ではなく味わうことが重視されるので評価を気にせずリラックスして取り組み、五感を使うことで感受性を高められる。また、視覚的表現なので直観的な自己理解を得やすく、他者とも共有や交流がしやすいといったことがメリットとして挙げられる。こうした点を活かしながら、学校現場の実態に合ったやり方で実施する方法を探ることが今後の課題である。

(本研究成果は「学校教育相談に求められる能力と研修 教師自身が捉える教育相談および教育相談研修の現状と課題」というタイトルで鳴門教育大学学校教育研究紀要第36号(2022)に掲載された。)

<引用文献>

- 土井一博・橋口英俊(2000). 中学校教師におけるイラショナル・ビリーフと精神的健康との関係, 健康心理学研究, 13(1), 23-30.
- 笠井孝久 教育相談に対して教師が直面する困難 千葉大学教育学部研究紀要, 63, 2015, 187-197
- 春日由美(2016). 教師の教育相談的資質向上研修における効果研究, 南九州大学人間発達研究, 6, 63-70.
- 久米禎子(2015). 心理面接の基礎訓練としての箱庭体験グループ, 鳴門教育大学研究紀要, 30, 255-265.
- 岡田康伸(1993). 箱庭療法の展開, 誠信書房
- 櫻井英未(2013). 女子大学生の自己受容および他者受容と精神的健康の関係, 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 19, 125-142.
- 高井範子(2001). 他者からの受容感と生き方態度に関する研究 存在受容感尺度による検討, 大阪大学教育学年報, 6, 245-254.
- 豊田園子(2014). 箱庭を作ること, 見守ること, 分かちあうこと 箱庭体験グループの実践から, 箱庭療法学研究, 26(3), 101-118.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 久米禎子	4. 巻 36
2. 論文標題 グループ箱庭を用いた教育相談研修における教師の体験と気づき：作品およびインタビューの分析から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鳴門教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/00028968	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 久米禎子	4. 巻 37
2. 論文標題 箱庭を活用した教育相談研修における体験過程の検討 個人およびグループでの箱庭制作体験に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鳴門教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 18-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/00029366	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 久米禎子	4. 巻 36
2. 論文標題 学校教育相談に求められる能力と研修 教師自身が捉える教育相談および教育相談研修の現状と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鳴門教育大学学校教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/00029340	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 久米禎子
2. 発表標題 箱庭を活用した教育相談研修の効果 自他に対する理解と受容に着目して
3. 学会等名 日本箱庭療法学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------